

# 井戸 net 環

~ ido から michi へ michi からムラへ ~

玄界島は博多湾の入口に位置する、232世帯、人口700人の漁業集落である。玄界島は福岡県西方沖地震により、斜面地盤の崩落や建物の倒壊が発生し、ほとんどの住戸が大きな被害を受けた。その結果、過半の島民が島内外の仮設住宅での生活を余儀なくされ、現在もお居住地の整備の遅れから、仮設住宅での生活が続いている状況である。このような状況において、大規模な開発をするのではなく、“玄界島らしい景観”“ライフスタイル”を継承していくことはできないのだろうか。



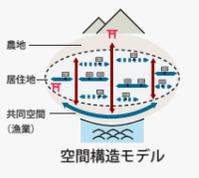
私たちはこの集落の震災復興計画に際して、現在使われなくなっている「7つの共同井戸」に着目し、それらが持つ地域コミュニティの核としての潜在的な能力と、災害時の有用性という2つの長所を活かした、共同井戸ネットワーク「井戸環 -ido net-」による集落再建計画を提案する。本計画によって、震災により変容しつつある地域コミュニティを、震災前、引いては共同井戸が活躍していた時代以上にまで再興することを狙う。

## Context

**被災状況** 集落のほとんどの住戸が崩壊し、玄界島の景観を特徴づけている石垣もいたる所で崩れている。平均傾斜角 25 度という急斜面に住むために作り上げてきた擁壁や階段状の生活道路が今、集落再建の障害になっている。



## 集落構造



集落住居群は玄界島の南側斜面に集まっており、山側に農地、海側に集会所や漁業関係施設等の共同空間が存在している。集落内には、若宮神社、小鷹神社、地蔵堂、観音堂といった信仰対象がある。住居はコンタに平行な横動線に面して並んでいる。神社はあるものの大きな祭も無く、仏教寺院も無いなど、信仰に基づくコミュニティは希薄であると言える。従って、共同井戸コミュニティはこの集落にとって大変貴重な存在であったと言える。

## 失われつつある7つの井戸

集落に点在する7つの共同井戸。かつては島民の命の泉であり、近隣コミュニティの核であったが、水道の敷設とともに使われなくなり、現在では形のみが残っている状態である。かつての貴重な井戸コミュニティが今、失われようとしている。私たちはこの井戸に、集落再建に貢献する大いなる潜在力を見出した。

## 不便な集落の動線

集落の骨格道路は、海と山を結ぶ雁木段と、コンタに沿った横動線とで構成される。横動線は、舗装された公的な道と、住居の前庭空間の連続からなる私的な道があり、後者は近年の住居の拡大とともに途切れつつある。斜面地にある道は、島民が愛着をもっている一方、狭く階段状であり、実際の生活には不便で、危険なものでもある。私たちはこの動線を集落再建にあたって改善すべき課題と捉えた。

## Concept

### “ido” を再興

#### コミュニティと防災の拠点へ

7つの共同井戸はかつて、生活に必要な水を得るために必要不可欠な、近隣密着型の生活拠点であった。この近隣密着型の生活拠点に、新たに7つそれぞれの機能を付加し、集落全体の生活拠点かつ防災拠点として現代的に再興する。その機能は以下の3つ。

- ・島内移動ネットワークの“駅”
- ・日常的に島民同士が触れ合う“交流拠点”
- ・災害時の安全を確保するための“避難拠点”

#### 7つの“ido” に場所性を反映

玄界島集落は、場所によって様々な魅力と特徴をもつ。これらの場所性を各 ido のプログラムへと反映することにより、玄界島の多様な魅力を顕在化する。そしてそれらをネットワーク化することにより、集落全体を舞台とする新たなライフスタイルを創造する。



### 井戸を“net”で繋ぐ

#### michi により人と物を循環

7つの井戸拠点を“環”状道路 michi で繋ぎ、エコバス(小型電気自動車)を循環させる。それにより、7つの機能を持ったあらゆる ido に楽にアクセスできるようになる。以前は近隣拠点であった個々の井戸が、集落拠点としての“ido ネットワーク”へと進化させる。



#### 既存の集落構造を継承

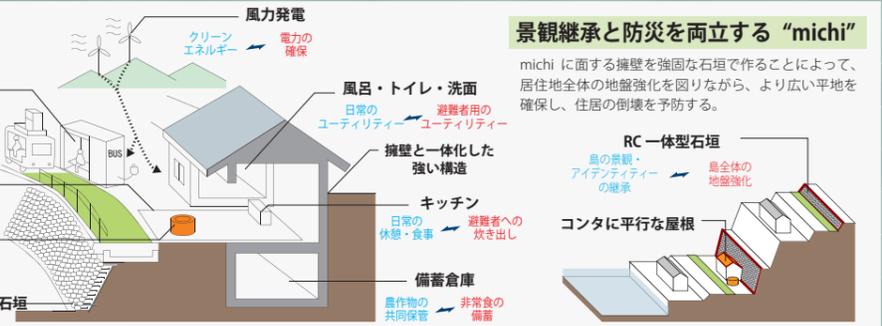
michi は既存の横動線を繋いで形成し、エコバスが走行できる必要最小限の幅員(2.5m)とする。それにより、既存の集落住居群配置を継承し、既存の近隣コミュニティの継承を図る。



## Detail

### “ido” の防災拠点への転換

井戸回りの拠点空間は、日常のコミュニティ形成の場であると同時に、災害時における避難施設としての顔も持つ。サスティナブルで、わざとらしくない形で防災機能を持たせることこそが、災害に強い集落づくりであると考えている。



### 景観継承と防災を両立する“michi”

michi に面する擁壁を強固な石垣で作ることによって、居住地全体の地盤強化を図りながら、より広い平地を確保し、住居の倒壊を予防する。

## Image

### 井戸環を巡る

玄界島に眠っていた7つの井戸たち。それらには7つそれぞれの新しい役割が与えられ、今、集落の新しい拠点として活躍し始めた。「漁」、「湯」、「杜」、「農」、「酒」、「子」、そして、「市」。それらは島民の生活拠点となり、コミュニティの核となり、玄界島のアイデンティティにまで成長した。また、住居の配置がほとんど変わらずに済んだので、震災後途絶えかけた近隣コミュニティも、震災前と変わらず残った。それだけではなく、少し離れた住民とも“ido”での交流で仲良くなれ、集落全体が活気ついたようだ。エコバスのおかげで、“ido”にも楽に行けるし、荷物を運ぶのも楽になった。とても小さいが愛着も湧く……。ほんとうにいい集落になったものだ……。さて、そんな玄界島のとある二人の一日を見てみることにしよう。

### 杜

「今日も天漁になるといいねえ」「そうじゃあお」「小鷹さんにお願ひしておう」

**神聖空間 礼拝と祭りの場**  
ここは、小鷹神社、地蔵堂等、信仰対象の集積地である。主に参拝の休憩所や村祭りの拠点として機能する。一年に一回、百合若伝説を上演する舞台を設け、島民のエンターテインメントの場となる。

### 農

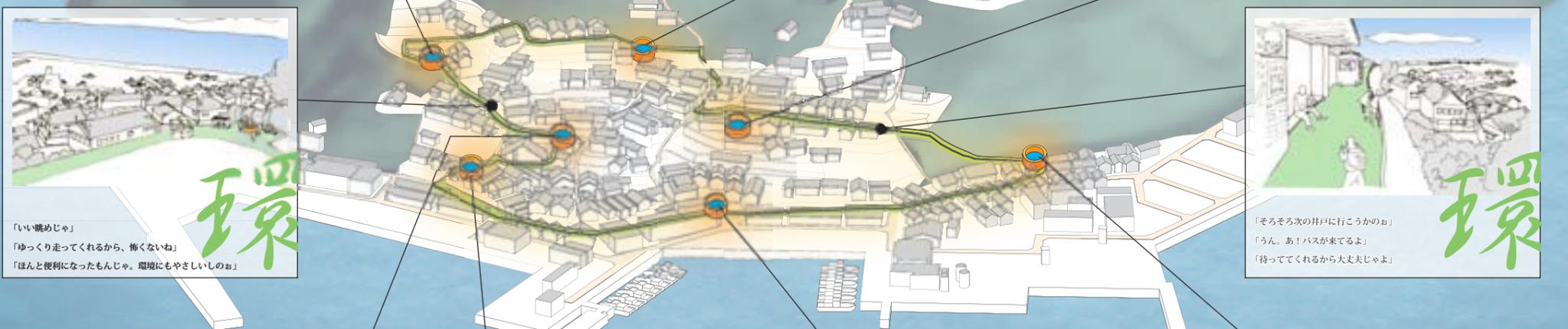
「あんたさ、今年の芋はどうだった?」「今年はまだまあまあ」「おまえさんどこで立派な芋だねえ」

**畑の麓 農を通じての交流の場**  
畑仕事をするための拠点。集落の人々はこちらから農具を取出し仕事に出かけ、ここで休憩し、情報や農作物の交換を行う。かつて畑仕事は島民の“労働”であったが、今日では“娯楽”として楽しんでいる。

### 酒

「おーやーますなあ」「おまえさん一杯どうじゃ」「子供が一緒だから今日はやめとくよ」

**最も水のきれいな井戸 酒・茶を飲んで楽しむ**  
集落の中で最も質のよい井戸の水を使った、おいしいお茶やお酒を飲む場。“井戸環会議”から“宴会”まで、井戸の水を通して様々な人が集い共に楽しむことができる。



### 湯

「暖れたら足湯につかいたいこのお」「今日から柚子風呂らしいよ」「おーそうかそうか、そりゃいいお」

**居住地の中心 湯につかって世間話**  
居住地の中心の共同風呂や足湯といった日常生活の疲れを癒す場。湯に浸かりながら、のんびりとお話を楽しんだり、互いの健康状態を確認しあうことができる。

### 漁

「おじいちゃん、今日は何が捕れた?」「今日はサバが大漁じゃ。おまえさんにもやるよ」「ほんと? ありがとう」

**漁師の休憩場 漁獲物の販売**  
漁の場・漁師の仕事の場として、漁から帰ってきた人々が集う場。漁獲物の販売や取れたての魚の調理も行い、魚市場の役割も果たす。

### 市

「今日は何が入ってます?」「今日はアラのいいのがあるよ!」「あら、いいんだんならだね」

**商いの中心地 島への玄関口**  
ここでは玄界島の漁業・農業の特産物を井戸水を用いて加工し、販売する玄界島の商いの中心。旅行者の観光案内所といった島の玄関を兼ねている。

### 子

「僕みんなもうちょっと遊んでく」「いいけど、暗くならないように帰ってこいよ」「うん、わかった」

**教育施設のサテライト 子供のための親水空間**  
ここでは、学校帰りの子供たちの居場所。池で水遊びをする遊び場であり、ピオトープで生物観察をする学習の場である。